

2021年7月30日

2022年3月期 第1四半期 決算補足説明資料

東証・名証1部 証券コード：2053
ホームページ <https://www.chubushiryo.co.jp/>
お問い合わせ先 TEL: 052 - 204 - 3050 総務人事部 総務課

◇ 連結経営成績	3
◇ 連結財政状態	4
◇ 畜産飼料の業界環境	5
◇ 飼料事業 実績	6
◇ 飼料事業 実績 ①畜産飼料	7
◇ 飼料事業 実績 ②水産飼料	8
◇ 中期経営計画達成に向けたアクションプランと1Q総括	9
◇ 今後の展望	10
◇ 自社一貫生産体制でさらなる成長を目指す	11
◇ 参考資料 一用語集一	12

(単位：百万円)

	21.3期1Q	22.3期1Q	増 減
売上高	43,973	48,158	4,184
飼料	36,524	45,346	8,821
その他	7,448	2,811	△ 4,636
営業利益	1,388	1,474	86
経常利益	1,507	1,592	84
セグメント利益	1,510	1,585	75
飼料	1,417	1,516	99
その他	213	182	△ 30
調整額	△ 120	△ 113	6
四半期純利益	1,002	1,134	131

売上高

- ◇ 飼料
販売価格上昇及び販売量増加により増収
- ◇ その他
収益認識会計基準の適用と子会社売却により減収

セグメント利益

- ◇ 飼料
6ページ以降で説明
- ◇ その他
 - 特殊卵や畜産物は量販店向けの販売が増加し増益
 - 畜産用機器は大型案件の減少や複数の機械の設置が2Q以降にずれ込み減益

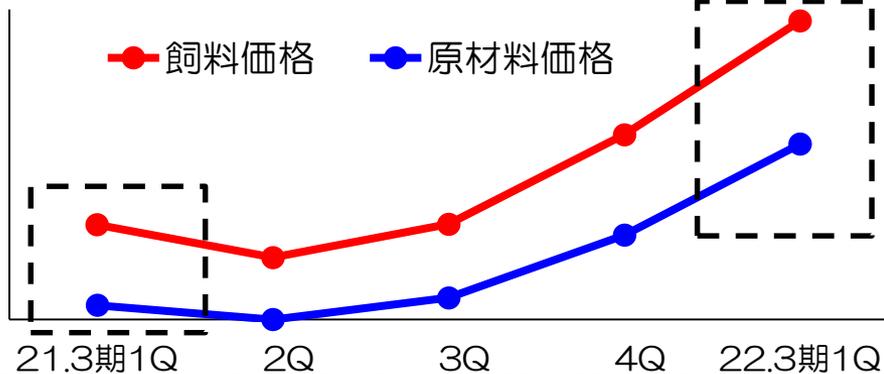
※ 従来「飼料事業」と「コンシューマープロダクツ事業」に区分していたが、22.3期1Qより「コンシューマープロダクツ事業」を「その他事業」に含めている
 21.3期1Qは、変更後の区分に基づき開示

22.3期1Q 連結貸借対照表

(単位：億円)

流動資産	562 (+3)	負債	273 (Δ3)
現預金	75 (Δ41)	仕入債務	144 (+12)
売上債権	331 (+27)	有利子負債	60 (Δ10)
たな卸資産	132 (+26)		
		純資産	608 (+5)
たな卸資産回転日数	27日	株主資本	589 (+6)
流動比率	261%	その他包括利益	12 (Δ1)
		非支配株主持分	6 (+0)
固定資産	319 (Δ0)		
有形	260 (Δ0)	自己資本比率	68.3%
無形	4 (Δ0)		
投資その他	54 (Δ0)		
総資産	881 (+2)	負債・純資産	881 (+2)

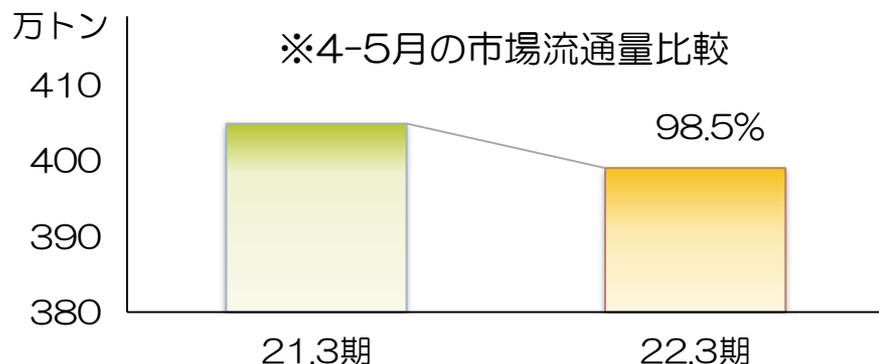
※ () 内の数値は、21.3期末との比較



原料ポジションの状況

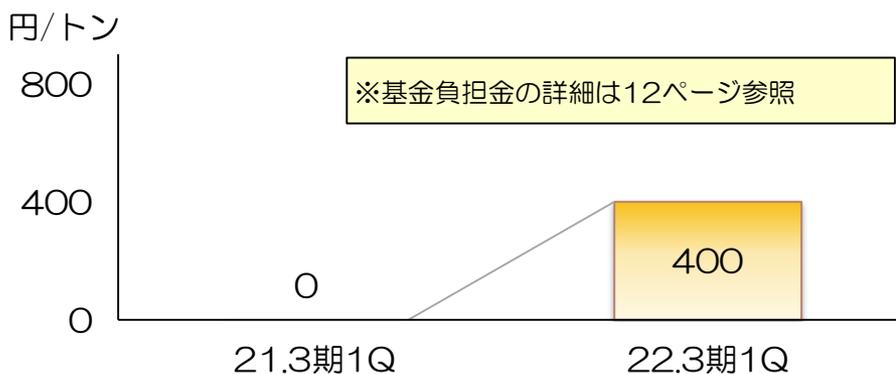
- ◇ 21.3期1Qは原料の下落以上の値下げで悪化
- ◇ 22.3期1Qは前年同期と比べて改善

原料ポジションとは、原材料価格と飼料価格の変動幅に生じるギャップやタイムラグを指す（※詳細は12ページ参照）



畜産飼料の市場流通量

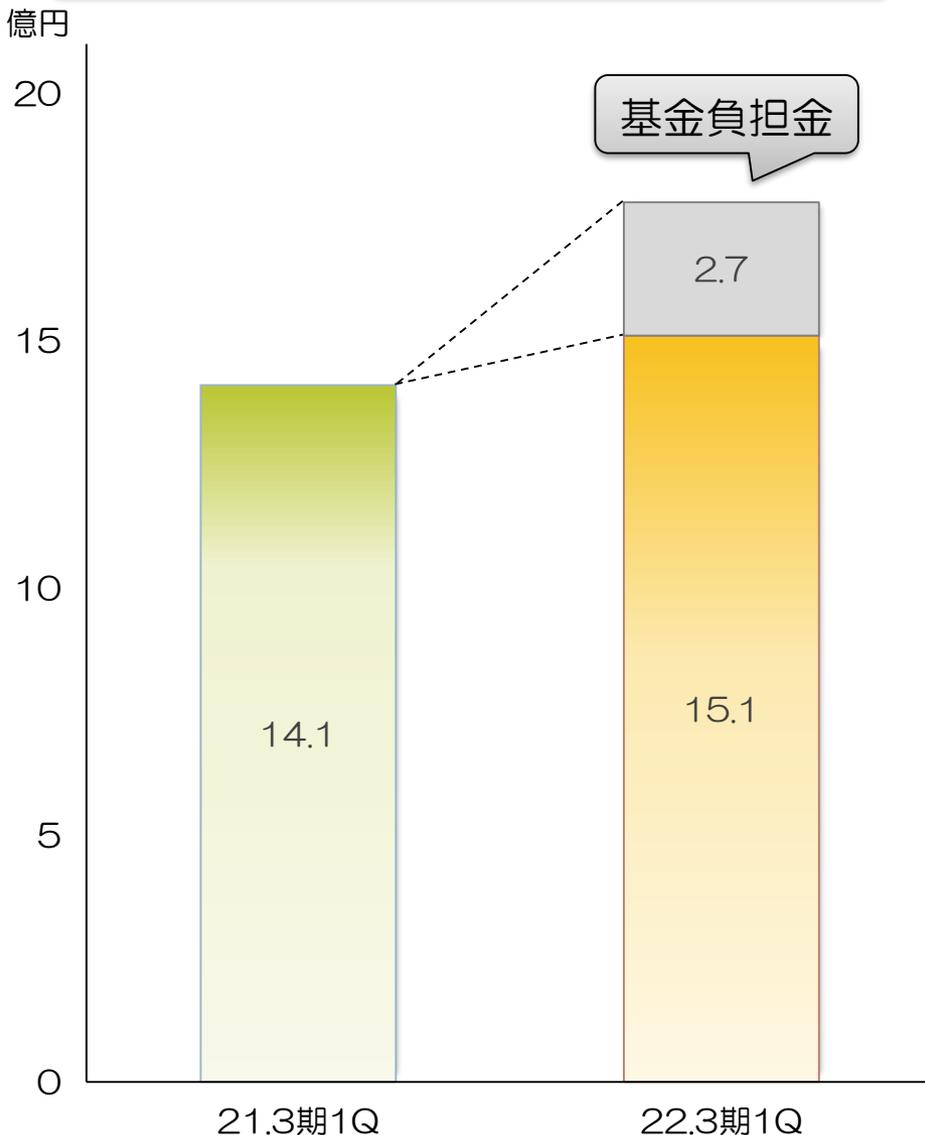
- ◇ 鳥インフルエンザ感染拡大により畜産飼料の流通量は伸び悩む
- 鶏の飼育羽数が減少し、特に採卵用飼料が大きく影響を受けた



基金負担金の単価推移

- ◇ 21.3期1Qは負担金なし
- ◇ 22.3期1Qより400円/トンの積立金が発生

セグメント利益の推移



セグメント利益

増加要因

- 畜産飼料販売量 増加
- 水産飼料販売量 増加
- 原料ポジション改善

減少要因

- 差別化飼料比率 低下
- 基金負担金による販管費の増加
- 水産飼料利益率 低下 (原料高)

※ 差別化飼料とは、お客様の生産性向上や特性ある畜産物の生産に貢献する高付加価値製品

主力の飼料事業は**利益増加**

項目	前年同期比	要因
販売量		<ul style="list-style-type: none"> お客様の生産性向上に寄与するブロイラー用飼料の拡販に成功 北海道は、ブロイラー用の他に養牛用飼料の拡販にも成功し、引き続き堅調に推移
差別化飼料比率		<ul style="list-style-type: none"> 鳥インフルエンザの影響で、差別化飼料の取組みが進んでいた採卵用飼料の数量が減少
原料ポジション		<ul style="list-style-type: none"> 前年同期と比べて改善
基金負担金		<ul style="list-style-type: none"> 22.3期1Qより400円/tの積立金が発生し、2.7億円の負担増



原料ポジションの改善と販売量の伸びにより**畜産飼料の利益は増加**

業界環境

- ◇ 水産飼料業界における競争激化が進む
 - ぶりの稚魚導入量が減少
 - コロナ禍で外食産業の水産物需要は依然として厳しい状況
- ◇ 主原料である魚粉の価格が前年同期に比べて上昇

項目	前年同期比	要因
販売量		<ul style="list-style-type: none"> ◇ 当社の飼料販売量は前年同期を上回る ○ うなぎ用飼料の販売が好調 ○ 特性ある飼料によりブランド化した水産物が飼料販売量を下支え
利益率		<ul style="list-style-type: none"> ◇ 水産飼料の利益率は低下 ○ 競争激化により原料価格の上昇分を価格転嫁できなかった ※ 水産飼料は定期的な価格改定がない

水産飼料の利益はほぼ横ばい

項目	アクションプラン	1Q総括
地域別販売戦略	<ul style="list-style-type: none"> 成長市場の北海道・東北でシェア拡大 	北海道 
		東北 
畜種別販売戦略	<ul style="list-style-type: none"> 営業組織を鶏・豚・牛に細分化 機動力と専門性をより高め、お客様に高度な提案を実施 	採卵用 
		ブロイラー用 
		養豚用 
		養牛用 
差別化飼料比率の向上	<ul style="list-style-type: none"> 汎用化した差別化飼料をブラッシュアップ 新たな差別化飼料の逐次投入 	差別化飼料比率 
水産飼料の拡販	<ul style="list-style-type: none"> ぶり・まだい用飼料の拡販 	ぶり・まだい用 

項目	2Q以降
畜産飼料販売量	<ul style="list-style-type: none"> • 鳥インフルエンザによる影響は当初想定どおり下期より回復する見込み • 営業組織を細分化し高度な提案件数が増加 ⇒2Q以降の拡販につながることを見込む
原料ポジション	<ul style="list-style-type: none"> • 2Qも1Q並みの水準で推移する見込み
基金負担金	<ul style="list-style-type: none"> • 2Q：400円/t、3Q以降：800円/t • 当初想定どおり下期より負担金単価が上がり、販管費が上昇する見込み
水産飼料	<ul style="list-style-type: none"> • ぶりの稚魚の不漁により飼料流通量は減少する見込み • ブランド化した水産物のさらなる拡販により、飼料販売量の増加を図る

伊藤忠飼料と一部地域で実施していた共同生産事業を縮小し、今後解消予定

再度、自社一貫生産体制に集中

飼料の製造工場は、自社工場とJV工場の2種類に分かれる

	自社工場	JV工場
メリット	<ul style="list-style-type: none">• 自社単独で意思決定ができる• 製販の一体感が生まれる• ノウハウが漏れにくい• 高度な技術を蓄積でき製品の差別化がしやすい	<ul style="list-style-type: none">• 大量生産によりコストが抑えられる• 1社当たりの投資負担が軽くなる
デメリット	<ul style="list-style-type: none">• コストが割高になる• 投資負担が重い	<ul style="list-style-type: none">• 意思決定に会社間の協議が必要

※JV工場…複数の飼料メーカーによる合弁工場

④は自社工場がお客様により貢献できると判断

スピード感に優れる自社一貫生産体制を最大限に活かし、さらなる成長を目指す

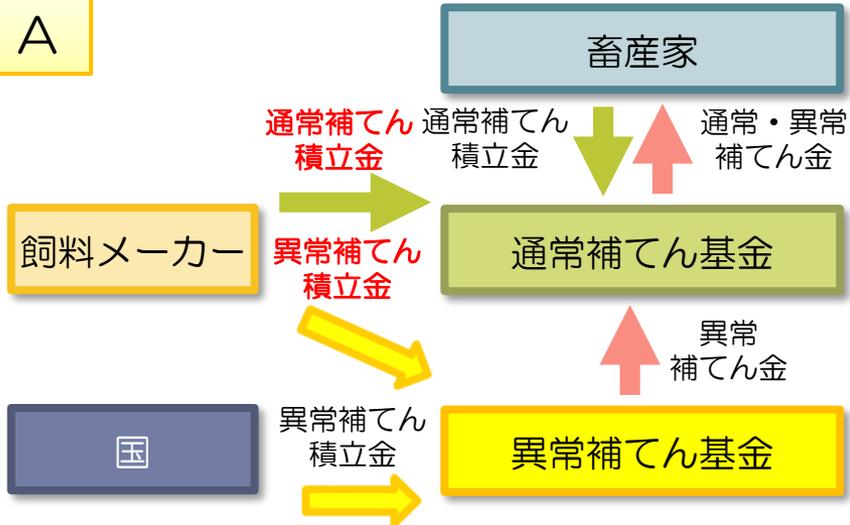
Q 差別化飼料とは？

- A
- ◇ お客様との取組みの中で開発
 - ◇ お客様の生産性向上や特性ある畜産物の生産に貢献する高付加価値製品

Q 原料ポジションとは？

- A
- ◇ 原材料価格は、穀物相場や為替、海上運賃等により変動
 - ◇ 飼料価格は、四半期毎に改定
 - ◇ 原材料価格と飼料価格の変動幅にギャップやタイムラグが発生
- ⇒ 原料ポジションが改善・悪化

Q 基金負担金とは？



目的 ◇ 飼料価格上昇による畜産経営の影響を緩和

- 内容** ◇ 畜産家・飼料メーカー・国が積立
- ◇ 一定のルールに基づき、畜産家へ補てん金を交付
 - ◇ 積立金は財源により増減



本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。